



Title	臨老での学びと社会的ニーズの高い研究への発展について
Author(s)	安部, 幸志
Citation	生老病死の行動科学. 2019, 23, p. 17-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73613
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

臨老での学びと社会的ニーズの高い研究への発展について

Lessons learned from Rinro and developed to research from the needs of society

(鹿児島大学法文学部人文学科心理学コース) 安部 幸志

(Kagoshima University, Faculty of Law, Economics and Humanities) Koji Abe

筆者は、1998 年に大阪大学大学院に入学し、2003 年に学位を取得したため、臨老に在籍していたのは、もう 15 年も前のことになる。記憶があやふやで正確ではない箇所もあるかと思われるが、先生方や諸先輩方には何卒お許し頂くようお願いしたい。

大学院に入学した当時は、柏木哲夫先生の他に、助手の山本恵子先生、平井啓先生の 3 名が在籍しておられ、手厚い指導を受けることが出来た。研究室としては、臨床を標榜しながらも、行動学の手法をどのようにして取り入れるのか、試行錯誤が行われていた時期であったように思われる。筆者が大学院に入ってすぐに携わったプロジェクトは、今でも引用されることが多い臨老式死生観尺度（平井他、1999）であった。そのプロジェクトが目的としていたのは、古今東西の死生観尺度を集め、共分散構造分析を利用し日本人の死生観の構造を明らかにするための新しい尺度を作成することであった。しかし、個人的には慣れない統計分析についていくだけで必死であり、自らの勉強不足を痛感するプロジェクトであった。分析してそれで終了ならば良かったのだが、そのプロジェクトは次年度の第 23 回日本死の臨床研究会で一連の発表を行うこととなった。

この研究会での発表が、筆者の学会（研究会）デビューであった。この発表は、その後の研究生活においても、かなり強い影響を与えることとなった。具体的には、先輩方も筆者もかなり若く、20 代前半であるにも関わらず、会場は立ち見が出るほど聴衆が集まり、発表終了後は、我々の前に死生観に関心のある方々が長蛇の列をなし、質問やコメントを次々と頂く状況となった。心理学では一般的な尺度作成と応用研究の一つだと考えていたため、死生観に関心のある方がこれほど存在したことに驚くと同

時に、社会的に関心のあるテーマを研究対象とすることの重要性を感じることができた経験であった。その後、筆者は介護負担・介護ストレスの研究を進めていくのだが、このテーマも研究としての知見の新規性よりも、社会的関心が高いであろうことを踏まえて選択した。

介護ストレスに関する修士論文を執筆し、次年度の日本老年社会学会第 42 回大会でその内容を発表すると、それなりに良い反応を頂き、関心が高いことを確認できた。しかし、その年に日本心理学会第 64 回大会で発表したときは、予想していなかった結果に終わった。まったく反応がなかったのである。自分の研究が完璧ではないことは理解していたため、肯定的な意見だけでなく、どこを改善すればよいか、問題点を指摘されることを期待していたが、そのような反応さえもないまま在籍責任時間が終わってしまった。当時は日本心理学会で介護関係の発表をしていた方は数少なく、関心のある方も少なかったのかもしれないが、学会デビューしたばかりの筆者にとって、このようなテーマを扱うことの難しさを実感させる出来事であった。

その後、筆者は 2003 年に学位を得て大学院を修了し、ポスドクを経て国立長寿医療センター研究所に就職することとなる。研究所に就職してからは自分自身の研究よりは、大きなプロジェクトの中での研究に携わっていたことが多かったように思う。その中でも印象に残っているのは、研究所では新しい知見を追い求めていく研究をするのか、多少手法は古くても国民のニーズに合う研究をするのか、という議論が起こったことである。研究所で働いている医学系の研究者は業績もあり、Science や Nature に論文を載せることを目的としている者も多い。し

かし、国立の研究所であるということは、税金で運用されているということであるため、国民が求めるもの、社会的関心の高いものがあれば、それを研究すべきだとも言える。これらは議論を重ねた上で、最終的には国立である以上、国民のニーズに合う研究をするべき、という方向性が所内で出された。国公立や私立に関わらず、大学における研究ではそのような強い縛りはないであろう。しかし、国立大学や国から補助を受ける科研費による研究では、将来的に同様の扱いが求められる可能性もありえると考えている。

研究所での研究生生活は有意義ではあったが、研究だけでは何か足りないと思うようになり、2011年に研究所を退職し、関西国際大学人間科学部に着任した。関西国際大学は兵庫県三木市にある大学であるが、入学者は兵庫県の播磨地域や但馬地域から来る学生が多く、それらの地域と密接な関係を結ぶことが重要課題であった。その中で、当時関西国際大学大学院の研究科長であった精神科医の渡邊直樹先生に誘われ、兵庫県北部および中西部における高齢者の自殺予防活動に携わることとなった。この自殺予防活動こそ、自分自身にとって足りないものを補填する活動となった。

心理学の中でも、医学に近い分野で研究に携わっていくと、介入研究を実施したいという欲求が出てくると思われる。しかし、うつや不安などの精神疾患に直接的に介入するためには専門家であってはならない。一方で、学生の多くは資格もなく専門家でもないため、介入研究はもちろん、授業で患者さんを対象とした介入体験をすることも難しい。つまり、講義や論文で扱っていることを心理学専攻の学生は一度も体験することなく卒業してしまうのである。正にこれが自分自身にとって足りないと思われたものの一つであり、専門家間の関心の高さと一般の市民や学生の意識との乖離を埋めるような活動をしたと考えていたのである。

この自殺予防活動は、兵庫県の新温泉町、朝来市、加西市の三つの市町村で実施し、その後自殺予防から発展させたコミュニティ支援活動として三木市でも実施した。それらの四地域での活動を経て、2014年に豪雨災害による被害があった兵庫県丹波市での

支援活動へとつながっていった。これらの支援活動は、基本的には学生が直接支援するのではなく、地域住民が自ら地域を活性化したり、ソーシャル・キャピタルを向上させたりするお手伝いをするものであった。方法は、年度ごとに多少手法は異なるが、地域の高齢者の自宅を訪問し、様々な課題をヒアリングし、学生がそれらをまとめた上で解決案を提示するものであった。その後、その提案をもとに、住民と学生とが一緒になって実現に向けた議論を行った。また、これらの提案が直接的に自殺予防やコミュニティ支援につながりなくとも、活動を通じて学生と高齢者の交流が深まることで、地域が活性化していくことを目指した。この活動は合宿形式で実施することが多かったのだが、短期間で学生が驚くほど成長するのを度々目の当たりにし、教育的にも意義のある活動であったと思う。

2017年4月より鹿児島大学法文学部に着任し、現在はまだ研究も教育も試行錯誤を行っているところである。しかし、2018年度より、桜島での豪雨災害で被災した高齢者を対象とした調査や、鹿児島県内の介護施設および認知症カフェ利用者の調査、そして阪大出身の鹿児島大学医学部大石教授が中心となって実施されている「たるみず元気プロジェクト」にも関わらせて頂いている。これらに共通するのは、やはり社会的関心が高いテーマであり、学生が参加することが可能で、地域の高齢者に直接成果を届けられる可能性があるということである。今後、筆者の研究がどのように発展していくのか、期待と同時に不安もあるのが事実ではあるが、臨老での院生時代に経験した、社会的関心が高く、ニーズのある研究に携わることの重要性を忘れないように努力を積み重ねていきたいと思う。

引用文献

平井 啓・坂口 幸弘・安部 幸志・森川 優子・柏木 哲夫. (1999). 死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証— 死の臨床, 23, 71-76.